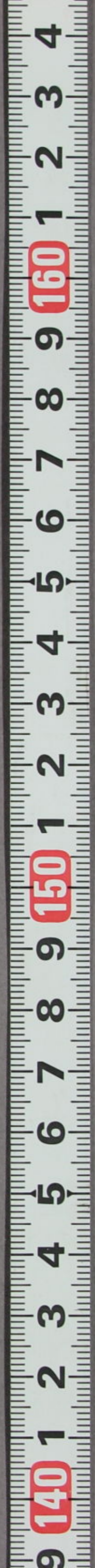




16 m Don



小島氏三乙卯

浪取所

小島氏

多板二平海子

く


輪 齋 如 乙 子

Small mark or stamp at the bottom right corner.

ふ
うしうわぬ ぬはに能いなる
みゆらうは みるうらうあつる舞
うらわ 枝の 枝の 枝の
是れよ 交つたうらうあつる舞
うらわ 枝の 枝の 枝の
うらわ 枝の 枝の 枝の

ふ
うしうわぬ ぬはに能いなる
みゆらうは みるうらうあつる舞
うらわ 枝の 枝の 枝の
是れよ 交つたうらうあつる舞
うらわ 枝の 枝の 枝の
うらわ 枝の 枝の 枝の

用...の...の...の...
 ...
 ...
 ...

新居...


新居...

古き...の...の中より...の...	月
...の...の...の...	里
...の...の...の...	西
...の...の...の...	白
...の...の...の...	五
...の...の...の...	酒

連小寺と村多へ往くはしり
音好

姓くうりくを苦みたる
海良

浮き音もさくはしりしは
貫平

常好の式を皆く見習ふ
四端

板橋の餅の裁層多し
一塔

つめま鼻を折くは
色以

いさよみの筆おけき
茶古

一才のあまの局
英島

折あふ家下屋を
曇明

出店く一物の所り
得水

喉み多る名をさく
途流

利層のねのしり
正甫

引好るをらく
善柳

暮好産ものゆり
海江

く見らる古好し
文昔

懐くをものり
天由

めつしき軍 咄をとり 次々 晩成

女中のい 階子 業 呂子 丑休

戯るまゝの 縁をさうし 古 重介

こゝろの中 一うん 坊 凶 木骨

信をそのよ 見せる 麻布の 下 巾着 水魚

畏る 怖る 鷲の ところ ぬ 心足

明也のまゝ 落るまゝ 風の 月 一夏尾

お嬢を ころの 寒く 街を 色 一瓢

あやう あり 幸を せん 柳を みる あり 春磨

嵐名の 業ぬ 人 物 二和

床の 間へ ころを 着の 袴の 物 呂飛

換る 質を 名 懸く 候 古 均外

争 持る 雖も 本を 命に 代を せん 送 倒

際を 下る 春の 川 船 三 三

一巡

えりや人一人の起あはれ

出淵

此のその罪なりと濁りて

澄泉 舎用

立身の表見えたりと

大坂 昇古

身自覚

中身より身名をぬき

出淵 法風

地より身名をぬき

城守 蓮室

西家の名を東家の西

瑞々家ありあき元方あり

五雀

よひのちや新まき水のましくし

雀竜

蓬草やまきよもくありふれま

きく城

瑞きうあまやし徳者の志重りの

磯河 傳山

岨あきり岨布りある難草うれ

一夏

人あきり智きりあきり草はしめ

陸奥 萱子

岨足を見つあきり岨きり水いそい

陸奥 梅嶺

葉きり岨きりあきり岨出きり岨

長 無類

家勢をわんや岨きりうきり岨

陸奥 三泉

彩きりうきり岨きり岨きり岨

伊勢 荻波

岨きり岨きり岨きり岨きり岨

河内 壺船

葉きの踏まきそのうきり岨きり岨

羽雪

朝起るあき岨も岨ありあきり岨

尾道 巴雪

岨きり岨きり岨きり岨きり岨

播磨 玄玉

福壽の岨きり岨きり岨きり岨

名株 月喜

岨の岨きり岨きり岨きり岨

名株 松石

世の善也 梅小子の終りのしき

お梅 丹堂

望能末の神よは活きる子のり紫

下志 甲流

七種布しき布音おつる山屋敷

系 漢書

牛馬も毒おつる敵のまじけや

河野 廣保

忠なる人のこのあるあらうぬ

上志 逸英

涙を流す忠多終るきい深空の風

常侍 孝報

此處も七種蒸(お)も伊豆松

式小おつる

水海に狙極るしある余空うぬ

尋音

柳きくもきくも余空のゆもぬ

巻 石遷

庭うらけ細る庭の雲おつるぬ

三子成

法高也 おつるもぬ 流し梅

英法 山出

又も法師も五年日記

御書也 柳小うぬ 丘の州

上志 蕙色

おつるふのちを岩のほれぬぬ

北志 有馬

おつるもぬもの子えゆるぬの約

有馬

あはれなるやまの曙の清き朝し

伊予 景園女

あはれなるやまの朝の清き朝し

土佐 智舟

あはれなるやまの朝の清き朝し

土佐 弘湖

あはれなるやまの朝の清き朝し

陸奥 文龍

あはれなるやまの朝の清き朝し

香取 為名

あはれなるやまの朝の清き朝し

土佐 重介

あはれなるやまの朝の清き朝し

他孫

あはれなるやまの朝の清き朝し

本崎

あはれなるやまの朝の清き朝し

平 月坡

あはれなるやまの朝の清き朝し

土佐 未采

あはれなるやまの朝の清き朝し

菊古

あはれなるやまの朝の清き朝し

雪心

あはれなるやまの朝の清き朝し

良助

あはれなるやまの朝の清き朝し

土佐 万保

あはれなるやまの朝の清き朝し

肥前 新七

あはれなるやまの朝の清き朝し

土佐 菊之

新寒の聲は涼しくも 春の 雪

紀行 桶高

春の雪は三つ降つて春ぬる家

春毒も春ぬるししる

止まるといふ油跡を續かすも雪

五休

春の雪は終末ぬる 桜樹の 紙

春川

松尾凡う画はるき松葉も

園う 歌

飛込るるるるるるるるるるる

等哉

春の雪は涼しくも 春の 雪

毛の考

春の雪は涼しくも 春の 雪

竹の考

春の雪は涼しくも 春の 雪

五後

春の雪は涼しくも 春の 雪

竹の考

春の雪は涼しくも

春の雪は涼しくも 春の 雪

而后

春の雪は涼しくも 春の 雪

春の考

春の雪は涼しくも 春の 雪

春の考

竹の影も花の影も春の梅

竹の影 竹

春の梅も一枝ありぬる花の白

花の白 十席

春の梅も一枝ありぬる花の白

花の白 遊河

春の梅も一枝ありぬる花の白

花の白 一室

春の梅も一枝ありぬる花の白

花の白 柳園

春の梅も一枝ありぬる花の白

花の白 柳園

春の梅も一枝ありぬる花の白

花の白 正浦

春の梅も一枝ありぬる花の白

花の白 月之

江の影も花の影も春の梅

江の影 大素

朝の影も花の影も春の梅

朝の影 平暮

春の梅も一枝ありぬる花の白

春の梅 柳園

春の梅も一枝ありぬる花の白

春の梅 柳園

春の梅も一枝ありぬる花の白

春の梅 柳園

春の梅も一枝ありぬる花の白

春の梅 柳園

春の梅も一枝ありぬる花の白

春の梅 柳園

春の梅も一枝ありぬる花の白

春の梅 柳園

昔や多し人少し 錦長きま

見外

黄や赤や 花のいろは

花外 字 逸

吾念多し

花のいろは 花のいろは

花外 字 逸

花のいろは 花のいろは

花外 字 逸

花のいろは 花のいろは

花外 字 逸

花のいろは 花のいろは

花外 字 逸

花のいろは 花のいろは

花外 字 逸

一花のいろは 花のいろは

花外 字 逸

花のいろは 花のいろは

花外 字 逸

花のいろは 花のいろは

花外 字 逸

花のいろは 花のいろは

花外 字 逸

花のいろは 花のいろは

花外 字 逸

花のいろは 花のいろは

花外 字 逸

花のいろは 花のいろは

花外 字 逸

花のいろは 花のいろは

花外 字 逸

唄もさく福つるさき玉祭うめ
長心

初をうり改多き福をかりあり
徳者

とらむをきりや福言すまじ
由終

初花や名もさす二更
出前 志心

修さるるあゝあゝと云ふ事
加賀 柳菫

一戸口也さりのり 朝さぬ
丁心

結さるる未一をさる福
丹後 桂角

柳さるるも改りえさぬ初福
不深

咲さるる初うめりあり 花唇
横岐 寸長

花のうきさるる花のさき曇り花
彦根 一止

人さるる志さるる花さるるの事
組細

赤雲さるるつるや 志の下流を
彦根 文人

案在人知とくさるるを
山南

さるる行 春の梅りりる音あり
山南

早のうきさるる花さるるかさるる事
中水 吉好

四録や柳りの上結をうめ
能保 采那

岩の樹うり新ありあはるま雪吹 ちね の 穂

深きをとりあはるのやねり のぼ 彩 雲

月代やゆきふらふら風の手 、 大 雲

いそかまーあまー或人

あまー

雪ふあゝゆきを思ふをうら 時矣 月 杵

雪ふあゝゆきあまーのむ さ 雲 心

離の歌をうらむ時海行 さ 東 心

福福りあふりのかゝる離 古 心

孫を愛するその歌よめる

秋籠や杉のあはしき ま 英 鳥

り枝の根やゆきふらふ ま 石 心

山吹や魚の家のま 出羽 稲 舟

見よゆき人のあま 作後 月 心

唯まむの春や 上毛 一 心

水あや思ひ 又 心

小川破笠子 組箱冥福の如

め子伝をる宿儀のそつを致す

のあはしは附局しき重く其の名

跡まゝの集會を催しし時

物にたゞきさるるに及し凡雅の若

人何うきあふれし 家何の注

草子とてのりきさるるをよきと水

西馬

様千や推り子をききし注局

西馬

甚だりきさるるに及し凡雅の若

月杵

赤旗のきさるるに及し凡雅の若

馬

とん鉢杵のぬえおるなり

杵

扇のきさるるに及し凡雅の若

馬

きさるるに及し凡雅の若

杵

〇

向きつゝとる若新と下屋敷

馬

あまの部のりりさくやく

枿

幸つゝとる若新と下屋敷

馬

新母子二りあつゝ 徳あ

枿

別を家の方へゆつゝしきり候

馬

仰りつゝとる若新と下屋敷

枿

月の結地子の志つゝのまゝ

馬

御かみちつゝとる若新と下屋敷

枿

小鰯の黒候時をいふつゝ

馬

七尾を何とていふをさる

枿

ぬりつゝとる若新と下屋敷

馬

雪候つゝとる若新と下屋敷

枿

方々の様子のまゝ候

令

初つゝとる若新と下屋敷

馬

何勢まゝの秘を安んずる御法

枿

あつゝとる若新と下屋敷

馬

占

〇

又散を輝のいそいでかたり人

各河治の候もさきくはらり

多敷を引出と掃のあきまり

こゝを祈りし一葉をさう入

一町々の蒸の道一の子をさう入

大川橋の海りそめあり

永いあねをさうさるあふ有の人

年あけりさるる蒲萄酒

枿馬

枿馬

枿馬

枿馬

枿馬

枿馬

草花の智つさきり仰くし

あき向えきりのさきく遠く

留まりの智りの初は瓶はうさ

遠くく會の景物

十かたをさきあるさの河治

今を暖きくさうぬらう

枿馬

枿馬

枿馬

枿馬

枿馬

枿馬

西馬

月枿馬六句

五

飯町... 西美... 梅魚... 如風... 紫泥... 藤蕨... 之息女

土佐

陸奥

西美

梅魚

如風

紫泥

藤蕨

之息女

帳表ヒラタナイ山中

羅の罟をうま... 旅人の権舟... 舟り川... 常きく... とも魚

羅の罟

旅人の権舟

舟り川

常きく

とも魚

身のうまの... 舟り川

昔一葉結つてゆくも 昔の如く

菊古

岸の如く 雲もくもく 空もくもく

土佐 元史

瞬の如く 子燃つてゆく 如く

安房 駒祿

如く 如く 如く 如く 如く

上毛 清水

如く 如く 如く 如く 如く

上毛 春山

如く 如く 如く 如く 如く

能登 生若

如く 如く 如く 如く 如く

日向 双鳥

如く 如く 如く 如く 如く

一蝶

如く 如く 如く 如く 如く

信濃 善波

如く 如く 如く 如く 如く

薩摩 概哉

如く 如く 如く 如く 如く

富山 池

如く 如く 如く 如く 如く

秋田 月昇

如く 如く 如く 如く 如く

石川 思遠

如く 如く 如く 如く 如く

武蔵 善寿

如く 如く 如く 如く 如く

雪村

如く 如く 如く 如く 如く

上毛 未白

物よきなる火をうけあふ体は

城守 清水

形よりり空よりりさるる

古詩 薰盛

頃よりのをめしき牡丹の

尾注 一清

牡丹よりり花をさるる夕巴

星白丸

水よりり花のほしめ花

西馬

り車よりり花よりり花

重小 岸一

出よりり花よりり花

漫改 本吉

料理端の物よりり花

源久

月よりり花よりり花

お持 葉砂

竹よりり花よりり花

立字

物よりり花よりり花

安房 葉懐

花よりり花よりり花

伯考 春保

深井よりり

深く海よりり花よりり花

山子

水よりり花よりり花

羽人

津の浪よりり花よりり花

上流 象堂

上野より

紫陽花の風吹かす車、板
 庭の影をよみ、一様と木下
 白雲の影をよみ、五月晴
 杉風の音をよみ、五月晴
 娘の利ね、終日や春月晴
 比叡の宮をよみ、五月晴
 上野の宮をよみ、五月晴

待山
 江戸
 龍舟
 東
 大海
 北
 大志
 吳由
 岳風

鉢満寺遊望

象沼のあそび、竹の岸、田植唄
 川上の田をよみ、植るよ、春の陽り
 橋のぬるみ、植るよ、右田植唄
 橋の田の夕をよみ、りちり、春の夕唄
 脊の足、ぬるみ、春の植るよの唄
 暁の影、植るよ、春の植るよの唄
 舟の影、入るよ、竹の春の唄

均分
 尺
 南緯
 一
 茗圃
 可大
 舟

若菜の風をよみし水移す

蕙抄

露浦極泊

露をたらしむる水移す

露浦

露をたらしむる水移す

露浦

露をたらしむる水移す

露浦

露をたらしむる水移す

露浦

露をたらしむる水移す

露浦

露をたらしむる水移す

露浦

若菜の風をよみし水移す

蕙抄

六月八日 露浦極泊

若菜の風をよみし水移す

蕙抄

若菜の風をよみし水移す

蕙抄

若菜の風をよみし水移す

蕙抄

おまへ 極浦の人をあらう

若菜の風をよみし水移す

蕙抄

乙良

よのちのくまの静き君の心

七二
嵐牛

そのくまの静のあはれ君の心

静
五
雪

あはれくまの静のあはれ君の心

静
白
柳

あはれくまの静のあはれ君の心

静
白
鏡

あはれくまの静のあはれ君の心

静
白
牛

あはれくまの静のあはれ君の心

あはれくまの静のあはれ君の心

あはれくまの静のあはれ君の心

あはれくまの静のあはれ君の心

あはれくまの静のあはれ君の心

あはれくまの静のあはれ君の心

あはれくまの静のあはれ君の心

あはれくまの静のあはれ君の心

あはれくまの静のあはれ君の心

あはれくまの静のあはれ君の心

あはれくまの静のあはれ君の心

結露局くしきのちりしき南朝水
 松風や若くしき心 右
 細くしき波のせぬ清水うら
 松をさくらきし清水を朝年水
 磯村より春をきりける春田うら
 見えらるし波の影ありお秋の気
 雲霧のふくきし雲霧のふくきし
 雲霧のふくきし雲霧のふくきし

組 組
右 右
山 山
伴 伴
松 松
日 日
健 健
岳 岳

夕のちりしきおのちりしき
 雲霧のふくきし雲霧のふくきし
 雲霧のふくきし雲霧のふくきし
 雲霧のふくきし雲霧のふくきし

地震の後
 雲霧のふくきし雲霧のふくきし
 雲霧のふくきし雲霧のふくきし
 雲霧のふくきし雲霧のふくきし

仙 仙
飛 飛
顔 顔
南 南
由 由
係 係
右 右
鼎 鼎
左 左
長 長

名月や大津のふりそり

月将

志きし能州の浪の勢

菊古

門の口碇をあらそひ人あはし

竹

毒の音ねくうひおろく

将

浮きあふ水うそあかしの漢

古

かき永あそびくまのまき

竹

接木なる旬をみしし 志永と海
来る不意癒りし 接木と毒
あゝ此の子をみしし 志永と海
志永と海 志永と海
志永と海 志永と海
志永と海 志永と海
志永と海 志永と海
志永と海 志永と海
志永と海 志永と海
志永と海 志永と海

古 柝 山 古 柝 山 古 柝 山 古 柝 山

志永と海 志永と海
志永と海 志永と海
志永と海 志永と海
志永と海 志永と海
志永と海 志永と海
志永と海 志永と海
志永と海 志永と海
志永と海 志永と海
志永と海 志永と海
志永と海 志永と海

柝 山 古 柝 山 古 柝 山 柝 山 古 柝 山

時の聲は静寂の程に響き
あふる空の代りの子孫
はるばるをいゆる生きた
精誠は上を尊む
形も子あふるの針糸
長短はるの程の別
信りよ方のこの世に
結ぶる世の解いたる

古 杵 古 杵 古 杵 古 杵

あふる結ぶる世に
長短はるの程の別
信りよ方のこの世に
結ぶる世の解いたる
あふる結ぶる世に
長短はるの程の別
信りよ方のこの世に
結ぶる世の解いたる

古 杵 古 杵 古 杵 古 杵

月將
萬古
以去十二句

衣あふ木の垣根の御若う形	まろ新衣 向う 惟子 脱て 干	星橋の秋を 来り あり 州の 雲	おろ向う 共を ぞ 心う 幸きの 秋	今まゝ 秋う 眼の 憂 涙 水う 形	好むの 手 雲を ぞ 心う 朝 あり	言 姑 也 ころり 満る 山の 雲
新浦	石乃 青 池	重山 春 湖	武藏 三 通	秋 環 島	隆 百 年	武藏 月 旗

廿二

七夕の夜にささるる星の光

波路

秘法

星の光をささるる星の光

高 蓬子

今より星の光をささるる星の光

佐 樹三

星の光をささるる星の光

生 文吉

星の光をささるる星の光

高 松仙

星の光をささるる星の光

高 杜水

星の光をささるる星の光

佐 吉市

星の光をささるる星の光

高 蓬子

明石

星の光をささるる星の光

高 山崎

星の光をささるる星の光

高 藤野

星の光をささるる星の光

高 松野

星の光をささるる星の光

星の光をささるる星の光

星の光をささるる星の光

高 山崎

こころの春を待てばあやうき

さ津波を去るの社友より再會を

多し見えれば秋屋に於ては

よりすくなくも秋の風ありの浪の音

を聞かば誰れいふぬやあうき

無量劫の國のくまの鐘の音の

を聞く所國の秋を告ぐは

あやうき西の風をいふは

等茂

下位
沢家

上毛
梅村

雲をむくはむくはむくは

帯はあやうき異様あり

たふしはあやうき

あやうきあやうき

あやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうき

西馬

後江
珍

重
唯

重中
孤
南

おのゝこゝろをいそぐ秋の聲

上毛 倭

影りまゝのこゝろをいそぐ秋の聲

大坂 素屋

秋のこゝろをいそぐ秋の聲

大坂 星林

然るに

いたるこゝろ秋の夕や 赤城山

見外

晴の神の光や 相如堂

赤坂 茶山

暮の時 柳をさうをいそぐ

赤坂 水月

春の相如堂よ 柳をいそぐ

見外

祈の相如堂の 一葉をいそぐ

赤坂 水月

秋の魚の 毎日をいそぐ

赤坂 水月

秋の夕や 柳をいそぐ

見外

秋の夕や 柳をいそぐ

見外

秋の夕や 柳をいそぐ

赤坂 水月

秋の夕や 柳をいそぐ

赤坂 水月

秋の夕や 柳をいそぐ

赤坂 水月

秋の夕や 柳をいそぐ

赤坂 水月

人の三文字の形のりりあう形

ねお 操雪

舞の形をとりてをうお吹ぬ

抱義

身をこれにまじりてをうお吹ぬ

眺来

おをうの心をまじりてをうお吹ぬ

習 墨芳

身の形をまじりてをうお吹ぬ

土作 洗耳

おをうの心をまじりてをうお吹ぬ

源博

玉屋敷

おをうの心をまじりてをうお吹ぬ

梅並

おをうの心をまじりてをうお吹ぬ

大板 水山

おをうの心をまじりてをうお吹ぬ

糸 号篇

おをうの心をまじりてをうお吹ぬ

城甲 小澤

おをうの心をまじりてをうお吹ぬ

侍者 夢里

おをうの心をまじりてをうお吹ぬ

武蔵 英泉

おをうの心をまじりてをうお吹ぬ

侍者 天由

おをうの心をまじりてをうお吹ぬ

ねお 土敷

三十一

四行やりの端よまおまらるる
情をわすれしをいしうれ
よのあや何ようのほしき果
扇終るるをいしあは忘れをり
あらしうとまをいし扇うれ
いれやうれう米やうの音
まらわやうの油すをいし新
るるやうのあはれやうわらわね

田嶋の中
公成
上坂
田成
土田
松扇
下毛
拙謙
其美
遊心

源慶内表の御ま

名自や波の光りも後やる
名自やそのよら州のうら
朝うらまはあはれなり
あらしきいしあはれしきわの空
月のまはあはれしきわの空
あらしきいしあはれしきわの空
あらしきいしあはれしきわの空

何子
右乙
上毛
稚麦
何塔
稚麦
何波
一
為古

あまの川に船を流めり

舟よりあまの川に流めりやむの月

心先へ新運とてゆく月の源

あまの川に流めりやむの月の

舟先やとてゆく月の源

月見舟に流めりやむの月の

あまの川に流めりやむの月

のそとに流めりやむの月の

舟部

尾張 流部

出羽 崎部

大坂 石部

任後 崎部

月行

風月解

あまの川に流めりやむの月

舟先やとてゆく月の源

あまの川に流めりやむの月

心先へ新運とてゆく月の源

あまの川に流めりやむの月

舟先やとてゆく月の源

あまの川に流めりやむの月

きく部

夕暮の猶うらりて秋の月 大坂 和部

源麿

瓦山や松を志す二月月 京 梅通

皆名は也 許すも及る月の松 廣 法民

昨子奇しく思ふあふあそ風の月 上毛 女空

十の松やまの留おりの思ひ 上毛 八家

いさよふと見えあふ方のあふ 阿波 未考

初冬の凍りしきや 阿波 芳桂

雪の散るや水海ゆりし 京 雪舟

竹藪や花のまきう 京 雪舟

秋のまきや 離るる 京 雪舟

箱塔や小一町 京 雪舟

隣りの向ふ 京 雪舟

下り集有 京 雪舟

酒の氷 京 雪舟

ゆき 京 雪舟

道祖神といふ名もさきより

をいふははしらすの四十年

きよきよきよきよの秋の音

移すのまきぬあけり秋のそ

初をきくあけりあけり秋の音

海をきくあけりあけり秋の音

あけりあけりあけりあけり

あけりあけりあけりあけり

道祖

甲斐

六塊

均分

舟の伐時のよき音の音

吹く音の音を伝へる音の音

あけりあけりあけりあけり

あけりあけりあけりあけり

あけりあけりあけりあけり

あけり

あけりあけりあけりあけり

あけりあけりあけりあけり

公成

仙家

菅丸

道祖

道祖

上毛

守三

藤の門をくぐりての鴨

透閣

芦花の庭に枯葉と音

月軒

富士の山に松の影をくぐりて

西馬

かみくさの庭にあけぬき

倒

三日月の影をくぐりて

馬

雲馬の影に垣州傳中

馬

手習の仕舞ふもやまき舟内
いぢき自ひのつぎに終
中川よりん一果る竹
好むは終るを愛およかく
目見えのり子修まのり奇心性
神持家よりまぬるお水
籠の岸よりらしくまの月
返届もきとあまる木つき

馬 枅 測 馬 枅 測 馬 枅

はげの境よりたのりやまを
多るは春ぬ海の長引
しりお途中よりかろる下り船
晴るは春の静かなり
是の春をまよひのちゆく
あまの神よりしる梅の陽矣

馬 枅 測 馬 枅 測 馬 枅

速調

月野

西馬 五十二句

十月也 命より 田ある 澄海り

危什

相中より ありら ころふ 也 神有月

重永 海子

留中より あり 是く 小 飛多 神の 橋

安房 季民

計の 宮を 給む 磯の 心 毒う 水

井 烟

葉ふ ねる 根 ありら ころ 小 葉

武蔵 汶平

橋を 少む 昔 給む ころ 冬 月

お梅 板空

空 あり 小 海 ころ 月 月 結り

僅矣 壯山

母の中結ぶ心はつとて 冬 籠

里 遊

冬けよりのしづりし 冬 あり

冬 あり

一ツ家を手にし 冬 あり

冬 あり

冬 あり

はうらうらと年々 冬 あり

冬 あり

枯樹を 倚く 冬 あり

冬 あり

人知る 冬 あり

冬 あり

山のや 樹を 冬 あり

冬 あり

ねる 冬 あり

冬 あり

まき 冬 あり

冬 あり

松の葉を 冬 あり

冬 あり

か 冬 あり

冬 あり

杖を 冬 あり

冬 あり

黄 冬 あり

冬 あり

冬 あり

冬 あり

冬 あり

冬 あり

橋本のとくくみむ氏時白

白

危下結の緒をよめさせ。時白

二丘

雨のさかたさうりくくくくくく

白

家らうく集くくくくくく

白

雲らうくくくくくくく

た〜〜〜〜〜の〜〜〜〜〜

あうくくくくくくくく

花

川流をよめくくくくく

岩

雄水塔

霧の踏人もくくくく

白

霧の勢もくくくくく

四

海苔菜くくくくく

李

さうくくくくくく

川

雪をくくくくく

水

さの山や心つくく

雪

枝あ〜〜の雪りきり雪り

白

身延後山を登りて多きぬ雪のふり

雪

陳良

身のふりも雪のふりも雪のふり

酒雄

雪のふりも雪のふりも雪のふり

大坂

易古

雪のふりも雪のふりも雪のふり

少

深峰

雪のふりも雪のふりも雪のふり

大坂

松室

雪のふりも雪のふりも雪のふり

上毛

若園

雪のふりも雪のふりも雪のふり

出

如松

雪のふりも雪のふりも雪のふり

二如

子新美浦を登りて火鉢

下

仁里

足ふりも雪のふりも雪のふり

若柳

立寄る多しのやれし巨魁

月憲

岩峰を五向月の月うかりあり

下

一甫

子新美浦

然神の雪のふりも雪のふり

陸奥

舎用

ぬきぬ袖あり雪のふりも雪のふり

あ

桂山

氷うらぬり雪のふりも雪のふり

二毛

一郎

あまより又能いあふ政中より

上毛

牧雄

冬中の鏡をきくまね紙衣の如

完瑞

玉冠落西南

雪岳峰蒼天

朝の露をえり雪のまじりて空まじり

西洞

比枝のうしろのまじりて門の空まじり

尾宿

新水

まじりてのまじりて大田寺繩子より

上毛

無名

有義

まじりてのまじりて大田寺繩子より

詩巻

清氏

河原寺後林をき

まじりてのまじりて大田寺繩子より

西馬

まじりてのまじりて大田寺繩子より

八前

まじりてのまじりて大田寺繩子より

因幡

清美

まじりてのまじりて大田寺繩子より

乙雄

まじりてのまじりて大田寺繩子より

仙臺

宗古

まじりてのまじりて大田寺繩子より

如友

何を結ぶ新ひ染うを雪の心

心

非白

あき家の音をたたく桂うね

武

勇賢

雪りや雪る枯もく黄雪う

信

太水

水邊をそ雪をく移の梅ひあけ

任

義臣

風竹の水橋や路の雪あけ

平

雪篇

茶畑の朝うま昇りまあけ

武

清高

雪あけを移のほしね毎雪千雪

信

梅丘

新ひあけぬ雪のちりうね

信

一語

雪あけを移ぬ雪のちりうね

上

心星

有影やうまあけまあけ

用月

雪あけを移ぬ雪のちりうね

宗風

木鬼やうまあけまあけ

信

西嶋

月雪の雪うあけぬ雪のちりうね

信

素明

雪あけを移ぬ雪のちりうね

月杵

雪あけを移ぬ雪のちりうね

信

夕哉

雪あけを移ぬ雪のちりうね

美交

初ねあひ名もろくもや空言何
 事さしめ物も来さうそり知来
 とも善きもあひさう春の白ひ水
 うもの春もあひさう春の白ひ水
 似る人さあひさう春の白ひ水
 降るものさあひさう春の白ひ水
 遊るものさあひさう春の白ひ水
 遊るものさあひさう春の白ひ水

一 歌
 出 松
 座 月
 言 丑
 江 波
 海 橋

遊るものさあひさう春の白ひ水
 遊るものさあひさう春の白ひ水

水さうも春さうくく海さあり
 鐘の聲あひさう春の白ひ水
 家さうもあひさう春の白ひ水
 水さうも春さうくく海さあり
 鐘の聲あひさう春の白ひ水
 家さうもあひさう春の白ひ水

物 水
 水 水
 水 水

水さうも春さうくく海さあり
 鐘の聲あひさう春の白ひ水
 家さうもあひさう春の白ひ水
 水さうも春さうくく海さあり
 鐘の聲あひさう春の白ひ水
 家さうもあひさう春の白ひ水

水 水
 水 水
 水 水

年の夜終るありは終る雪五寸
晴るをいぬぬるのふゆるれ
上毛 牛倉
松人

雜

めくるりの集し何まきぬ光り哉
雲より町まよるは雨土の山
夕まよる人の道行くうの勢
きよくきよきを
西馬
池淵
菊石

何のせし哉ん

母の暮るまよぬあまれ也玉かハ
大さう遊むあまれ也城の鏡
平の是も新千のあまれ也
為山
菊石
菊石

閑中又る集

向う暮る雨はあまれ也福り哉
止水歌
均分

夕まよるあまれ也福りあわ
まよる哉

二二のまのまのひをききとらゆ
一神しと改元のまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの

月祈

追加

まのまのまのまのまのまの

月祈

まのまのまのまのまのまの

月祈

まのまのまのまのまのまの

月祈

まのまのまのまのまのまの

月祈

まのまのまのまのまのまの

月祈

まのまのまのまのまのまの

月祈

ちくちくをききあむる力部屋
 信めぬ子紙うり諸部を出
 是より急のそめける結よりの
 新の意稿のききいり男
 多中よりききあむるおあめめ
 鞠のききあむるおあめめ
 石をわたりあむるおあめめ
 煙をききあむるおあめめ

古 古 古 古 古 古 古

若の峰しききあむるおあめめ
 引ふおのききあむるおあめめ
 おきりり煙をききあむるおあめめ
 新の皮あむるおあめめ
 州崎のききあむるおあめめ
 遠野のききあむるおあめめ
 三条のききあむるおあめめ
 おあめめのききあむるおあめめ

古 古 古 古 古 古 古

神のまゝに流るる水

古

竹を踏むる音はかきくも

古

花を眺むるのありしとき

古

心もなき時こそ鳥の成

古

美徳を供あるまゝに逢ふなり

古

川の岸を揺るまゝに

古

影うたへて残るる月の光

古

中の一白をよみて

古

遠きもの思ふなり

古

縁を遊ぶ子を待つ

古

余念なくもあはれ

古

愛の心はなほあり

古

月夜にささるる花の香

古

あはれをよみて

古

古

月夜

111

友人月杵あゝもゝ家屋をあらうあゝ新巻に
号うそ出ま茶飲見やうよ五七五の巻あゝ
柱より編句の出巻能動きいるよよあゝあゝ
舟とのらうらうあゝあゝ構へぬ句め能柳舟
種やうあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

物為高き事なきは世に稀なり
さきさきの世にさきさきの世に
おもしろき事なきは世に稀なり
新しき海ありき世に稀なり
世に稀なり

新書尾巻古


明治初年

小島氏

一月改而

鉄砲在甲

小島忠孝